

図書選択を利用した個人別態度構造分析の提案

Analysis of Personal Attitude Construct using Book Selection

学籍番号：201721696

氏名：三島 悠希

Mishima Yuki

個人別態度構造分析 (以下 PAC 分析) とは内藤 (2002) によって開発された、自由連想を元に個人ごとの態度やイメージ構造を分析する混合手法である。この手法を用いることで一人ひとりの思考の内部構造を把握することが可能である。しかしながら、PAC 分析の手続きである自由連想は、イメージ喚起能力や言語能力が低い被験者には難易度が高いという問題がある。そこで、本研究では自由連想の代替として図書選択を利用した PAC 分析を提案し、自由連想の難易度を下げ、従来手法のように個人ごとのイメージ構造を把握することが可能かどうか検証することを目的とする。

本研究では自由連想を代替する 2 つの方法を提案する。1 つはテーマに沿った図書を選択してもらい、図書そのものを連想語の代わりに利用する方法である。自由連想を行わないことで難易度を下げながらも、図書選択という行為に内在する態度やイメージを活用することが可能である。もう 1 つは選択した図書を参照しつつ自由連想を行ってもらう方法である。この方法は自由連想の補助のために図書を参照するため、従来手法より自由連想の難易度が低くなることが期待される。

提案する手法の効果を検証するために、2 つの調査を行った。調査 1 では自由連想の代わりに図書選択を用いた PAC 分析を行い、調査 2 では図書から自由連想を行ってもらう PAC 分析を行った。対象は年長から小学 3 年生の子ども 9 名であり、2 つのグループに分けてそれぞれの調査を実施した。

調査 1 の結果、図書選択を用いることで連想にかかる時間と負担を減らすことができた。調査 2 の結果、被験者 1 人当たり平均 10 個の連想語が出され、実際に言葉に出しにくい部分も「ここ」と指差しを行い連想を行う様子が見られた。この結果から自由連想に対するハードルを下げることができた。また、調査 1 では「目次が多いほうがわかりやすい」と図書の目次に注目している様子や、各被験者の図書の好みについてのイメージや態度を抽出することに成功した。一方、調査 2 では、インタビューの際に悩んだ様子で「わからない」と回答した対象者が多く、PAC 分析としては上手くいかなかった。この原因として今回の被験者には連想語を用いたインタビューの難易度が高かったことが原因として考えられる。

今後の課題は図書の冊数の検討と、対象者を変更して調査 1、調査 2 の実施を行い、詳細な調査手法の違いをさらに検証することである。

研究指導教員：宇陀 則彦

副研究指導教員：松村 敦